（八　名池之部）

大池　紀伊郡にあり、元伏見の沢田と云、半分久世郡に入る、小倉村にあり、巨椋郷と云也、池の廻り四里許、五社百首に俊成卿、ふしみ津や沢田の早苗とる田子は袖もひたすら見しふつくらん

二三　宇治川両岸一覧　文久三年（一八六三）刊

暁鐘成／淀川両岸一覧・宇治川両岸一覧　柳原書店　昭和五三年（上）

豊後橋　〈平戸橋の上ニあり、向島にわたす、当地第一の大橋なり、長サ百十間、北ハ紀伊郡南ハ久世郡に属す、此辺にいにしへ大友豊後守のやしき有しより名とすといふ、伏見院皇居の時は桂橋といふ、指月の縁にもとづくなるべし、北詰を豊後橋町といふ、此北に隣れるを玄蕃町といふ、石川玄蕃頭、又は山口玄蕃頭などの第ありし遺名なるべし、南詰を向島といひて、旅宿貸食家諸商売の家建つづきてにきわし〉

巨椋堤　〈豊後橋の南詰向島を右へとりて、大和街道に趣く堤なり、秀吉公のきづかせ給ふ故に俗ニ太閤堤といふ、大池の眺望佳景なり〉此地はいにしへ船にて渡りし所にて、槇堤・巨椋堤なき初ハ宇治川の流落入て西の方伏見川淀の東にてハ木津川と合し渺々たる一面の入江なり、故に大和にいたる街道ハ木幡の里より岡之屋を経て宇治橋をわたり、一の坂を越て巨椋の南広野に趣きしなり、然るを秀吉公の時此堤を築かせ給ひしより大和往還の便宜なること普く世人の知る所なり

（挿し絵「豊後橋　向島　巨椋堤　巨椋江」、「其二」に「をぐら江おぐら堤」「まきづつミ」の記載あり）

巨椋神社　〈街道のひがしニあり、延喜式ニ出、祭神春日明神、おぐらの里の生土神とす、例祭九月十日、当所の杜和歌ニ詠ず〉

名寄　宇治山の紅葉の色をかこふ哉　をぐらの杜の覚束なさよ

左近

巨椋入江　〈おぐら堤より西一円に渺々たる水面なり、俗におぐらのお池といふ、池の長サ二十九丁、幅十五丁といふ、堤より東にも池あり、丸池といふ、其初ハ東西一面の入江なりしを、秀吉公の時堤を池の中にきづき給ふゆへに堤の左右に池わかれて二所となれり〉

此入江には、蓮・河骨多く生じて夏月の花盛りにハ殊さらに美観なり、小舟に棹さしてここに炎暑をさけ遊宴を催すに双びなし、冬ハ水鳥許多あつまり、且常に鱗しばしば生ずれバ、此辺の里民漁猟をなすの地とす、〈因に云、此入江の蓮葉蓮花ともに七月上旬にいたれバ残らず切とりて京摂の精霊会にひさぐを風とす、さる程に蓮花の景色を眺望せんと欲せバ、六月下旬より七月十日已前までに行ざれバ見ることあたわず、遊客かねて心得べし〉

槇堤　〈豊後橋南詰を東へとりて宇治にいたる堤をいふ、宇治橋まで凡五十町、此間に下嶋・上嶋・目川・槇の嶋等の民村あり、槇の嶋よりつづきし堤なるゆへ槇堤とよべるなるべし、是も秀吉公の時に築かせ給ふところなり上嶋より黄檗にわたる渡舟あり、俗に隠元のわたしといふ〉

指月　〈豊後橋北詰より東江戸町までの地名なり、山を指月山といひ指月の森ともいふ、前の往来ハ六地蔵にいたる街道なり〉

此所ハ伏見の勝地にして前にハ宇治川の流を帯て通船の往来絶間なく、西南にハ巨椋の江渺々として方一里の水面なり、月を愛するは無双の景色にて、古へより高貴の楼閣を営ミ清質の悠々たるを升、澄暉の靄々たるを降すの地なり

月見岡　〈月の後山にあり、一名宇治見山といふ、秀吉公此所に楼台をいとなミ月を賞し給ふ古跡なり〉

宇治見山隆雲寺　〈右同所にあり、此地は城山の内にして字を三河屋敷といふ、天台宗〉

本尊観世音〈常憲院殿御念持仏にして石川備中守拝領して当寺に安置す〉、大師堂〈仏殿の東ニあり、元三大師自作の像を安す〉

当寺初は敦賀町にあり、正徳年中珍興和尚中興して此仏刹を開く所なり、城山当寺のほとりハ方十町ばかりの桃の林にして、弥生の花の盛りには紅艶の色をあらわし、宇治見山よりの眺望殊更によく、早瀬を下る宇治の柴舟、巨椋の池の水鶏、鳥羽竹田の行人、淀の城郭、八幡山崎の翠巒までも眼前に有て、騒人墨客の心を動かせり

（下）

鈎月（釣月）　〈槇嶋の内の地名なり、今詳かならず〉

此地は四面渺々として東に宇治川西に巨椋の江あり、是ゆえに月を愛するに無双の勝地なり、古人此所を賞して鈎月と号く、伏見の指月、槇嶋の鈎月ミな佳境として一双の地なり

二四　京華要誌　明治二八年（一八九五）刊

京都市参事会／新撰京都叢書三　臨川書店　昭和六二年

（上　名勝）

遊覧暦表

（七月）十三日　蓮〈巨椋池〉

（下　名勝）

南部

巨椋神社　久世郡小倉村

本社は延喜式に見へ、春日の神を祭る、当村の産土神なり、九月十日例祭を行ふ

伊勢田神社　久世郡小倉村字伊勢田

祭神詳ならす、延喜式社にして、貞観元年正月従五位下を授くること国史に載す、社格は村社なり、毎年九月九日を以て例祭を行ふ

巨椋湖　久世郡小倉村

一名大池といふ、東西凡三十二町、南北二十七町、周回三里余あり、むかしは宇治川の流域ここに滙して巨浸となり南の方淀川に連る、万葉集の歌に「おほくらの入江とよむなり射目人のふしみの田いにかりわたるらし」とありてむかしより名高きところなり、豊太閤伏見城造営の時大堤を築き湖河を区分し、また観月橋より南小倉村に至り湖の東部を横断し道路を通し、大和街道〈上古は宇治橋を渡り平等院のあたりを過き南都に通ひしこと史書に明かなり〉となしたるより湖面は割して二分となる、西部最も濶く湖水渺茫として風光明媚なり、春風の朝秋月の夕は西湖二十四橋の風景を想見せしむ、東部は湖面小にして水稍浅く蓮花水に満つ、七八月盛開の頃舟を買ふて湖中を徘徊するに雲錦万丈清香衣を撲つ、花弁殊に大にして径尺余に至る、葉の大なるものは三尺余なるあり、例年水高き時は舟中に坐して遠近の花を看るへきも、旱天には舟中に立つも花葉肩を

没することあり、また河骨白菱同時に花を水面に泛へ幽娟愛すへし、看蓮の客は前夕より夜涼に乗し、伏見にいたりて一泊し、払暁の花を賞するものあれとも、大抵は午前二三時より車を駆り暁行するもの多し、堤上の茶店に命し扁舟を僦へは一隻にして凡五六人を容るへし、旅店飲食店は不十分なれとも、宿泊飲食等に差支なし

又この湖中魚鰕に富み、漁法も種々あれとも、看蓮の序にはハス釣り最も興味あり、前後より幾百となく釣竿を流し置き翌朝竿を拾ひ上くれは五六寸の銀鱗溌剌として釣に上る、大抵一竿に一尾を得る、また消夏の一楽なり、但し前夜より漁父に命しおかされは間に合ひかたき事あり

二五　旧都巡遊記稿　大正七年（一九一八）刊

秋本興朝／新撰京都叢書四　臨川書店　昭和六〇年

（近郊之部二）

巨椋湖

小倉村にあり、伏見観月橋を渡りて右折し、更に南に去る四五町にして湖畔に到るべし、湖の広袤東西三十二町、南北二十七町周回三里に余れり、昔時豊公の桃山城を築くや、北は豊後橋より南は小倉村に至り、湖面を横断して堤塘を築き、道路を通じて大和街道となせしより、湖面は東西二つに分かる、西部は頗る広闊にして、御牧一口の村落、八幡の翠巒、宇治黄檗等の眺望あり、淡妝濃抹共に西子の艶に匹すべく、東部は水底浅く湖面小にして水光山色の風景に乏しと雖も、紅白の蓮花水上に満つるあり、杖を曳き船を泛べて君子の美を賞すべし、実に騒人墨客清遊の一勝区たり

巨椋神社

小倉村にあり、観月橋を距る大約四十町なり、本社は南面し春日神を祭る、当村の産土神なり、本社の前に拝殿あり、東に子守大明神社あり、境内に華表二あり、一は本社に属し、他は子守社に属す

観音寺

巨椋神社の南にあり、浄土宗にして本堂に運慶作の本尊阿弥陀仏を安置し、右檀に円光・善導両大師、左檀に中観世音菩薩、左右地蔵尊・毘沙門天・薬師如来及び曼荼羅等を安置す

二六　伏見叢書　昭和一三年（一九三七）

西野伊之助／新撰京都叢書五　臨川書店　昭和六一年

（第五編　名所旧跡誌）

五　巨椋池

昔ノ伏見ノ広沢ハ、紀伊・宇治・久世・綴喜ノ四郡ニ跨リテ、其面積極メテ広大ナルモノナリシカ、豊公伏見山ニ築クニ及ヒテ、宇治川ヲ伏見ニ疏シテ水量ヲ伏見ニ集メ、之ヨリ巨椋湖ノ中央ニ流シテ大阪ヨリスル舟運ノ便ヲ計リタリ、名所記ノ著者ハ皆秀吉ハ要害ノ為宇治川ヲ伏見ニ引キシト記セルハ大ナル間違ニシテ、其儘ノ方遥ニ要害宜シキナリ、巨椋湖ハ此ノ宇治堤・小倉堤ノ築造ニ依リ、其面積ハ広沢時代ニ比シ大ニ縮小シ、六地蔵沼・四谷沼ノ分湖ヲ生シ、次テ慶長元年秀吉ハ毛利家ニ命シテ淀川堤坊ヲ修築セシメ、其年ノ冬竣工セシカバ、又横大路沼ノ分湖ヲ生シ、爰ニ伏見ノ広沢ハ全ク巨椋湖ト改称スルニ至レリ、殊ニ従来宇治川本流ハ宇治ヨリ直チニ広沢ニ入リシモノ、秀吉ノ川ノ付替ニヨリテ迂回シテ淀ニ流ルルニ

及ビテ、其流緩慢トナリ、従テ洪水時ノ濁流ハ沼岸ニ沈殿シテ浅瀬ヲ埋立ル殊極メテ速ニシテ、爾来三百年間向島村葭島新田沢地ハ埋立ラレテ良好ノ水田ヲ形成セシ殊頗フル大ニ、従テ巨椋湖ノ縮小モ又大ナリケリ、殊ニ最近淀川改修ノ結果ハ淀川ノ水位ハ一米低下セシカハ、其面積ハ一層縮小セリ

六　太閤堤

宇治堤ハ前記ニ記セシ如ク、宇治川ノ水全部ヲ伏見ニ導クタメニ築キタルモノニシテ、宇治ノ西ニ於テ本流ヲ塞キテ之ヲ槇島村ノ東側ヲ北方ニ導キ、東目川ニテ支流ヲ塞キテ、本支流トモ上島ヲ流ルル第二支流ニ導キ、其中程ヨリ六地蔵ニ向テ流ルルハ余リニ迂回ニ過クルヲ以テ之ヨリ直線ニ指月ニ向テ新ニ河川ヲ開鑿シ、以テ伏見ニ通シタリ、指月ヨリ南ヘ巨椋湖ニ直線ニ河川ヲ開キ、其土ヲ東側ニ上ケテ堤坊トセシカ、此堤坊湖水ノ中程ニ迄ニ及ヒシヨリ、今少シニテ巨椋ニ達セハ大和ニ通スル道路大ニ近クナルヨリ、引続キ施工セシモノノ如ク、斯クテ小椋堤坊モ又出来セリ、此ニ堤坊ヲ秀吉ノ施工センコトトテ、世ニ太閤堤ト称ス、今ニ両堤坊共交通上頗ル重要ナル道路ナリケリ

三十三　宇治見山

伏見細見図絵云フ、宇治見山、今の城山南の尾崎をいふ、古は伏見尾山ともいふなり、それ此地は南方遥かに晴て、東の方には小野・醍醐・黄檗山、其麓に岡の屋の行こう舟、宇治橋、平等院、橋姫の屋しろ、槇島、木の間々に見へて、眼下には豊後橋、小椋池、西には淀の堤長く、幽に淀の城、八幡の神廟、山崎の離宮、淀川の流れまて鮮に見へて月の清き頃は公達か仙をもて月宮殿におもむき霓裳羽衣の曲をかなててても此地に比せんや

山城名跡巡行志云フ、月見岡、古城山ノ西ニアリ、今宇治見山ト云フ

顕常大典ノ遊覧記云フ、〈中略〉行く事数百歩、一寺に至る、龍雲と云ふ殿堂の外に従倚し、其能く勝地を占むるを羨む、舎てて栄し一阜を得、是を宇治見台と為す、其宇治と正に相向ふを以てなり、蒼松天を翳ひ爽塍愛すべし、桃花至る毎に屋を架し筵を肆ね、遊燕の所と為す、而して今は乃ち幽闇遼闊、吾脩をして松根に踞し、心目の聘する所を恣にせしむ、宇治の水を見るに、蒼山の間に仕き勢長蛇の如し、右して小倉湖と相並ひ、白波瀰漫天に接す、之より以て大和に誘す、二三子と地方の処所を歴指し久しふして乃ち下る〈下略〉

宇治見、往昔花時以テ見ルベク、桃花の盛ナリシ頃ヨリ花時茶店出テテ紘歌ノ声騒カシク、以テ大正ノ世迄ニ及ヒシモ、桃山御陵ノ御造営アリテ、御料地一帯借地人ヨリ地所耕作ヲ引上ケ、杉樹ヲ栽植セラルルニ及ヒ、掛茶屋不可能トナリ遂ニ其姿ヲ没スルニ至レリ

二七　京都土産　明治二八年（一八九五）

著者未詳／新撰京都叢書一〇　昭和六〇年

「滝池見立」池之方　紀伊久世　巨椋池

「著名物産見立鑑」（東之方　前頭）同　巨椋湖の蓮根

「四季之詠名所見立」（勧進元）巨椋湖の蓮

「都百景見立」巨椋湖の霧

「ものづくし」退屈なもの　宇治堤の歩行

二八　奈良電気沿線名所図絵　昭和三年（一九二八）

奈良電気鉄道株式会社

小倉

▲巨椋池　一に大池とも云ふ。東西凡そ三十二町、南北二十七町、周囲三里余。昔宇治川の流水が此処にたまつて湖となり、南方淀川にまで連なつていたのを、秀吉桃山城造営の際、長堤を築いて湖と川とを区分し、又観月橋から南小倉に至り湖の東部を横断して大和に入る新道を通して大和街道としたので（上古は宇治橋を渡り平等院のあたりを過ぎて南都に向つたものである）湖面は二つに劃せられ、今又奈良電鉄によつて街道の西沿岸を埋立られたわけである。西部は渺茫としてよく大池の面目を発揮し、蘆荻しげつて風光亦明媚である。東部は小さく且浅い。古来蓮花の名所として知られ、亦釣狩猟の名所として都人士に愛せられいる。

小倉村には式内の古社巨椋神社がある。嵯峨天皇の弘仁年間（約一千一百年前）勅によつて春日明神を勧請したものである。亦巨椋池のほとりに鎮座する子守神社は文徳天皇の皇子惟喬親王が子供愛護の深き大御心によつて建立し給ふた社で、毎月二日を例祭とし、特に四月の春祭、十月の秋祭には子供の無事出世を祈る親達で時ならぬ賑ひを呈するのである。

当駅よりは近く宇治に至る支線が開通される筈で、省線奈良線、京阪電車宇治線と共に探勝者を便すること大なるものがあるであらう。

近世の紀行・道中記にみる巨椋池

ここでは、これまで翻刻刊行された宇治関係記事を含む紀行のうち、当館が調査・収集を終えているものについて、巨椋池に関する部分を紹介する。

前項にまとめた地誌の記載からあきらかなように、豊臣秀吉はみずからの城下町伏見へと交通路を集約すべく、周辺地域において大規模な土木工事をおこなった。伏見の南側、向島へ豊後橋（現在の観月橋）を架け、そこから宇治（南東方向）と小倉（南方向）へ向けて堤防を築く。前者は、巨椋池と宇治川を分離して水上交通のルートを伏見に引き寄せる意味を、また、後者は巨椋池の中央の堤を街道とすることにより、京都・伏見と奈良間を宇治へ迂回することなく、最短距離で結ぶ意味を持つ。

特に後者は、大和街道として多くの旅人たちが利用することになり、様々な記録が残される。また、池の北側の宇治川は伏見と大坂を結ぶ三十石船が行き交い、またその北側の堤防は大坂街道、あるいは東海道五十七次の一部であり、池の南側にも八幡と宇治を結ぶ道が通じていた。このように、池のぐるりを取り巻くルートの利用者も少なからず存在し、伏見の宇治見山や、八幡の男山など近くの高台から巨椋池を望んだ人びとととともに、巨椋池の景観を知る上で貴重な記録を提供してくれている。なお、資料一・二は、豊臣秀吉による地域改造以前のものであり、当時の景観がうかがえる貴重な記録ともなっている。

宇治市域とその周辺の街道については、宇治文庫九『宇治の道　旅人と歩く』（宇治市歴史資料館　平成一〇年）を参照していただきたい。同書で紹介した主なルートについては、次々頁に地図を掲載した。

各史料は、

番号　年月日

見出し

出典／掲載書

本文

の順に掲げた。〈〉内は原文では割注、（　）内は本書編集上の注記である。→は所収関係をしめす。

巨椋池を含む宇治市域全体に関する紀行・道中記については、その概要を特別展図録『宇治名所図会』に「宇治を旅した人びと（安土・桃山時代以降）－宇治来訪者一覧－」としてまとめたので参照していただきたい。また既刊の『収蔵文書調査報告書1「白川金色院」と恵心院』『同2　笠取地域の古文書』『同4　宇治上神社文書』でも、それぞれに関係する紀行文などを掲載している。

一　天正三年（一五七五）六月六日

島津家久（薩摩・島津貴久の四男）、上洛中宇治を訪れる。

中書家久公御上京日記／神道大系文学扁五参詣記　神道大系編纂会　昭和五十九年

一　六日、早朝出立（奈良）、宇治ニ著、平等院一見、東に朝日山、その麓に渡の河に橋の小嶋、水上ニ款冬の瀬、其上ニたうのしま、朝日山、其うしろに喜撰法師の住いし所とて有、亦こなたに扇の島、宇治の橋姫の明神、河の向に三室、其より槙の島、橋の横三間、たて十七間也、儲槙の嶋古田賀兵衛入道玄良といへる人の寺へ立寄、一見候へハ、順礼何もたへよかしと有し間、領掌仕に、軈而食をいたし、内へと申され候へ共、只是にてと縁に居候へハ、さらはとて、其儘我ハ内よりしょうハん、酒をそれそれと候まま、五はいつつけ候へハ、ほめられ候もかた原いたくこそ、さて其比迄また鳥屋にいしさるたかをミせられ候、きとくの由申候、さて四帖半茶湯の座敷によひいれられ、ちゃをもたへさせられ候、其より清泉寺迄送られ候、舟中にも酒をのせ、地下衆両人舟にのり、一人ハ舞をまハれ候、さて名所なとをミるに、槙島より北西に伏見、其より未申方ニ大念（大倉＝小倉の誤か）の入江、さて跡にこはた、其より北に藤の森深草、其より東ニすミ染のさくら、さて行て稲荷に参、少やすらひ、井の本に立寄、水のむへき由申候へ共、其家の有主酌をうはひ取、水をさへおしむ、まことにかきの心にこそ侍れ、さて宗慶にいとまこひし、行て三十三間ニ参候へは、和田玄蕃・一閑斎迎にとて来られ候、其より紹巴の館のことく帰候

二　天正十一年（一五八三）五月

度会貞徳（伊勢神宮神官）、上方見物の途次宇治を訪れる。

貞徳他行道之覚／続々群書類従九地理部二　国書刊行会　明治三十九年

宇治へ心ざし行道のおぼえ

ふか草やいなりの社藤の森　木幡を行は伏見とそ聞

かち路くたびれ侍りて

山城のこはたの里に馬はあれと　たちんなけれはかちにてそゆく

古ことよく出合のままおもしろく侍りし、宇治へ罷着、槙の島聞しにまさる興地、いへばさらなり、その橋にて心ある出家に逢て橋の小島、山吹の瀬、八の宮の御旧跡など相尋て、平等院へまいり心静に打休み、町の長の茶いるりなど見物し、宇治川の河上そこともみえず侍りければ

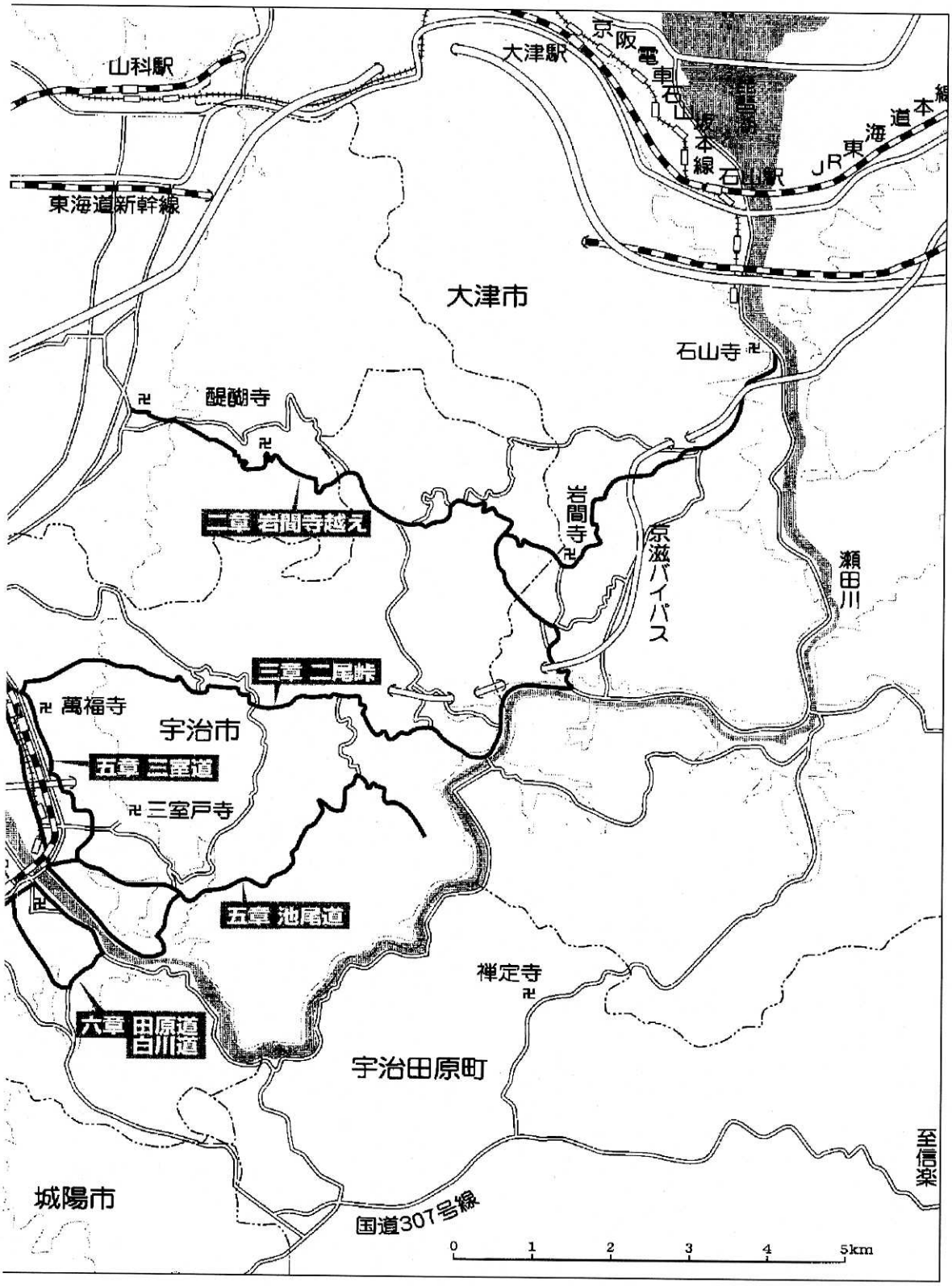
宇治川のこの河上をたつぬれは　出る朝日の山あひの水

是より堺へ越さん道はいかがといへば、大坂の城かはりめにて路次いかがよしいふ、さらば京へ罷かへらんといひいひ猶さかひへの道の事たづね候へば、をぐらと云所よりよき便船ありと云、その家のむこなる人なん、ただ今つなをくだす、それにいひ合せんと有ければ、幸の事とてをぐら（小倉）より舟に乗日暮に淀の里に着ぬ、道に水車ところところにみえ侍りければ

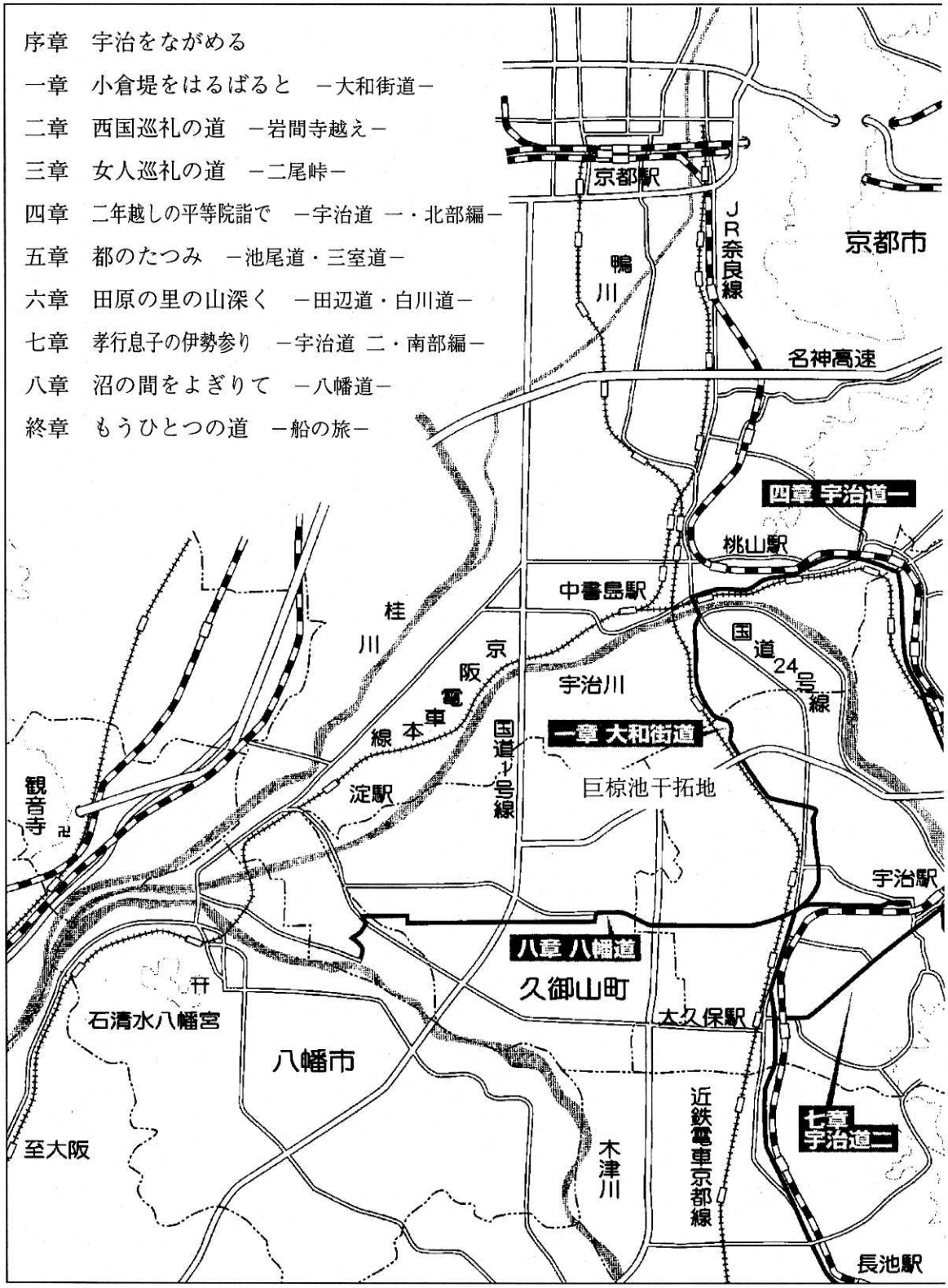
行水にくませてめくる水車　夕日をこほす影そ冷しき

三　天和三年（一六八三）五月二十七日

江戸の某、有馬湯治の帰途奈良より小倉を経て京にいたる。


山科駅
東海道新幹線
大津駅
京阪電車石山坂本線
石山駅
JR東海道本線
大津市
石山寺
醍醐寺
二章 岩間寺越え
岩間寺
京滋バイパス
瀬田川
三章 二尾峠
萬福寺
宇治市
五章 三室道
三室戸寺
五章 池尾道
禅定寺
六章 田原道 白川道
宇治田原町
至信楽
城陽市
国道307号線
0 1 2 3 4 5km

序章　宇治をながめる
一章　小倉堤をはるばると　－大和街道－
二章　西国巡礼の道　－岩間寺越え－
三章　女人巡礼の道　－二尾峠－
四章　二年越しの平等院詣で　－宇治道 一・北部編－
五章　都のたつみ　－池尾道・三室道－
六章　田原の里の山深く　－田辺道・白川道－
七章　孝行息子の伊勢参り　－宇治道 二・南部編－
八章　沼の間をよぎりて　－八幡道－
終章　もうひとつの道　－船の旅－



千種日記／史料京都見聞記一・紀行1　駒敏郎・村井康彦・森谷尅久　法蔵館　平成三年

奈良を出て京に至る事

廿七日　天晴（中略）

なを行て広野村をすぎ、右に宇治へ行道あり、ゆきゆきて左に淀の城みゆる、おくら（小倉）の里を経て、右に御社有て、小倉の大明神と申し奉る、なを木津川のつつみを行て、右に伏見の古城みゆる、やうやう伏見に至りて、豊後はしといふ所に宿をかりて休む、このはしのながれは、宇治川のすそなり。たちよりし家、川にのぞみて風ふき入て、いとすずしきに、小舟さしつれて、柴舟こきまはすけしき、いとおもしろし、式部の物かたりに、あらましき水のをととかいつれと、折にふれてはひがごとのやうに覚ゆ、このころは宇治の茶もつみはて、葉揃の頃にやとおもひ出る、なを出て、藤の森、稲荷をすぎて京に帰る。月ころはい中に侍りて、しばしながらも都にあらん事とて、人びとよろこぶ

四　元禄五年（一六九二）

貝原益軒、小倉を経て大和におもむく。

和州巡覧記／日本紀行文集成1　日本図書センター　昭和五十四年（昭和版帝国文庫紀行文集　柳田国男　昭和五年の復刻）

○豊後橋　秀吉公の時、豊後の国主大友氏はじめて此橋をかけられし故、名づけり、昔は此道なくして、奈良へ行には宇治を通りて行しなり、秀吉公おぐら（小倉）堤をつかせ、此橋をかけさせ、此道をひらき給ふ、五条橋より二里、一条札の辻より伏見京橋まで三里、豊後橋へは三里に少近し、向島は豊後橋を越て西南也、豊臣太閤伏見在城の時、向島に源君の御宅あり。其御跡今に残れり、まはりは沼也

○巨椋の茶屋　豊後橋より五十町あり、其間小倉堤なり、堤の上に民家二所有、皆槙島より作出たる店也、巨椋の入江万葉に歌あり、名所なり

五　享保十二年（一七二七）六月二十四日

似雲法師（歌人）、巨椋池にて蓮見をする。

年並草（自筆歌集）／としなみ草　弘川寺・土橋真吉共編　全国書房　昭和十八年

水無月廿四日、小倉堤に舟をうかべて蓮を見侍し頃

池ひろみ花咲方に行舟の　分るもをしき露の蓮葉

舟すくる跡よりやかておきかへり　露の玉ちる池のはちすは

舟中にて友とする人の笛を吹きけるを、はるかに波路へだてて、此舟よりきけば

物の音も竿の雫もかほるなり　はちす花咲く池のそほ舟

六　宝暦七年（一七五七）十月三日

本居宣長、京都修学を終え松阪への帰途、小倉堤を渡る。

在京日記／史料京都見聞記二・紀行2　駒敏郎・村井康彦・森谷尅久　法蔵館　平成三年

（十月）三日　けふなん都をたちて初瀬へまうて、開帳し奉りてかへる也、（中略）さて五条の橋をわたる程、やうやう都をはなるると思へは、いと名残のみおしくて、年比此はしわたりて、そこはかとまか